

国柄探訪
平成24年10月14日付け

メール
マガジン

袋背負いの心

「新釈古事記伝」から
外国人も賞賛する我が国の「思いやり」社会の理想は『古事記』に説かれていた。

1. 大きな袋を背負つて

出雲大社に祀られている大国主命には大勢の兄弟、八十神たちがいた。ある時、稻葉の国(島根県東部)に八上比賣という日本(の)の女神がいると聞いて、兄弟で嫁取り競争をする事になった。しかし、太古のこと(で)途中には道のないところが多いし、旅館もない。米、味噌、醤油から、鍋釜、寝具にいたるまで、持つて行なければならぬ。そこで、八十神一同で相談して、皆の荷物を大きめの袋に入れ、大国主命に運んで貰うよう頼むこととした。大国主命は力を持ちだし、また立派そうなので、荷物運びの従者のように見せかければ、八上比賣から選ばれることもないだろう、という鬼胆だつた。

八十神たちに頼まれて、大国主命はピックリしたが、自分が荷物を背負わなければ、嫁取り競争も取られやめるしかない、と聞いて、「よろしくうございませ」と答えた。

こうして、大国主命は、人で大きな袋を背負い、八十神たちに従つて、歩いていった。その姿はどう見ても従者としか見えない。

しかし、大国主命は、決して「自分はお供ではないぞ」などとは仰せになりません。

平気な顔をして、黙つておいでになります。

お顔を見ましても、少しも自慢そうな様子ではなく、まことに元氣よく、ニコニコしておいでになります。

「1, p.35」

2. 「古事記」に凝縮された古代日本人の心

最近、刊行された『新釈古事記伝』の一節である。書名は厳めしいが、文章は小中学生にも読める。物語から、著者は自らの心に映つた大和民族の深い理想を解き明かしていく。

著者は阿部國治氏。戦前の東京帝国大学法学部で英法を学び、副手になつたが、その後、同じく東京帝大で印度哲学科で学び、首席で卒業した、と

3. 稲羽の白兎の感謝

八十神に会いに、稲羽の国に向かう一行は、白兎に出会う。白兎は隱岐の島に生まれて、ワニを騙して、本州に渡つたが、騙されたワニが「痛かり治つた」と思つて、嫌われた旅行道具を一切引き受け、大きな袋にお入れになり、これを背負わされました。この袋を背負われる気持ちが非常に大切だと思います。

阿部氏は、この『古事記』の一節を、次のように解説している。

「この八上比賣の言葉に、八十神たちは、一言も申し上げられません。ですから、できることなら、私は大国主命様のよ

うな方のところのお嫁入りしたいと思います。」
「1, p.44」

申しあげられません。

この八上比賣の言葉に、八十神たちは、一言も申しあげられません。

申しあげられません。

申

